

## だい ハラビ平遺跡 (本発掘調査A・B)

**所在地** 北設楽郡設楽町大名倉ハラビ平地内  
(北緯35度06分26秒 東経137度33分01秒)

**調査理由** 設楽ダム

**調査期間** 令和6年11月～令和7年1月

**調査面積** 857㎡

**担当者** 堀木真美子・河嶋優輝



調査地点 (1/2.5万「田口」)

**調査の経過** 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受け、実施した。当遺跡では平成27年度および平成30年度に本発掘調査Aが行われており、その結果を受け、今年度の本発掘調査Bが実施された。今年度の本発掘調査Aの範囲は、本発掘調査Bの南側にあたり、遺跡範囲を確認する目的で、2m×1mのトレンチ(以下TT)1箇所、4m×1mのTT1箇所、2m×2mのTT7箇所の計9箇所を設定して実施した。調査面積は計34㎡である。本発掘調査Bは調査区を西から24A・24B・24Cの3区に分割して調査を実施し、調査面積は計823㎡である。

**立地と環境** 遺跡は豊川上流の左岸に所在し、北東から南西に向かって下る緩斜面に位置する。現状は植林による杉林である。当遺跡から豊川を上流に向かって500mほど遡った右岸には設楽町指定史跡の大名倉遺跡が所在し、下流方面に約400mほど離れた左岸側には令和2年度に本発掘調査Bを実施した胡桃窪遺跡が所在する。

**本発掘調査Aの概要** 本発掘調査Aの対象地内東側には2段に渡る棚田が残っており、各段には石垣が残る。棚田より西側は緩斜面となっている。

棚田部分では、上位の段に2m×1mのTT01、下位の段に4m×1mのTT02を設定した。それぞれ、厚さ0.2～0.4mの表土下に黒褐色土が堆積し、現地表面から1.5mほどで礫を多く含む黄褐色粘土質シルトの基盤層に到達する。基盤層までの間に遺物包含層は確認できず、遺構も検出されない。両トレンチとも谷地形の内部にあたるものと考えられる。

緩斜面部分では、2m×2mのTT7箇所を分散して設定した。層序はほぼ全てのトレンチで一致しており、厚さ0.2～0.4mの表土下に基盤層が広がる。基盤層の傾斜はほぼ現地形に沿う。基盤層上面で遺構はほとんど確認できず、異地性と思われる遺物が少量出土したのみである。

**本発掘調査Bの概要** 本発掘調査Bの対象地は本発掘調査Aの対象地の北側にあたる。東側には3段に渡る棚田が残り、西側は緩斜面となっている。検出された遺構の帰属時期は、縄文時代と古代の2時期がある。前者には竪穴建物1棟、石器・縄文土器を含む土坑数基が確認され、後者には底部に被熱痕の残る土坑1基、土師器甕・灰釉陶器を含む土坑数基がある。

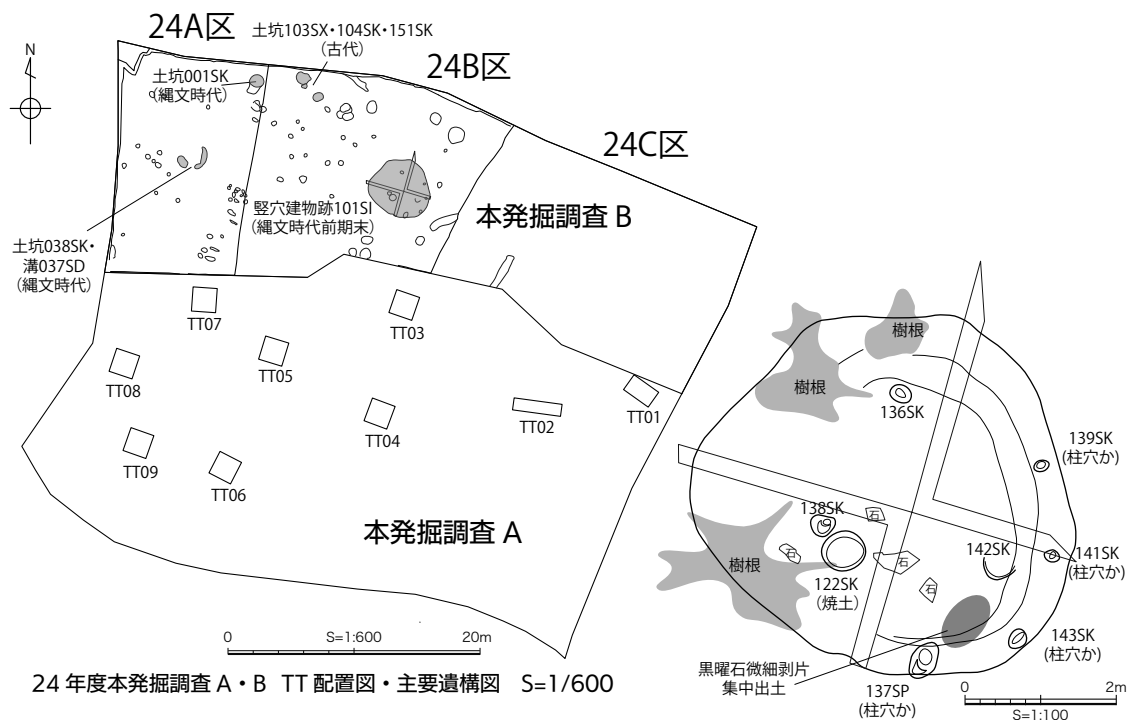
**竪穴建物101SI** 竪穴建物101SIは24B区で検出された。平面規模は短軸約4.8m、長軸約5.1mで、プランは樹根による攪乱もあり不整円形となっている。斜面地のため、掘り方は北東側が深く、南西側が浅くなっており、底面は水平に近い。基盤層は角礫を多く含む居住に適さないためか、礫の少ない土を底部及び壁面に貼って床面とする。床面はやや硬化している。

明確な炉跡は存在しないが、埋土に焼土を含む土坑122SKが床面で検出された。ただし被熱面は確認できなかった。竪穴建物外縁に並ぶ小土坑群に柱穴の可能性はある。

埋土・貼床土からの出土遺物は縄文土器、磨石・敲石類、打製石斧、石鏃のほか、黒曜石の微細剥片が100点以上確認されている。縄文土器の帰属時期は前期末が中心であるが、一部に早期後半や中期のものが含まれる。

**被熱土坑** 103SXは埋土に焼土が含まれる不整円形の土坑で、断面形は浅い皿状をなす。基盤層を掘り抜いた底面には明瞭な被熱痕が残る。出土遺物はないものの、隣接する104SKで灰釉陶器、近接する151SKで清郷型甕などが出土しており、古代に属する可能性がある。

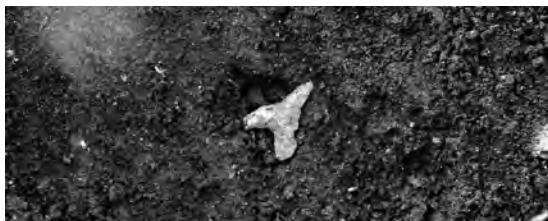
**まとめ** 今年度調査で検出された縄文時代前期末および古代の遺構は、近接する胡桃窪遺跡でも確認されている。胡桃窪遺跡と異なり縄文時代中期の遺構は確認できなかったが、中世から遺構が途絶える点は両遺跡で一致しており、大名倉地区の豊川左岸の遺跡として、ある程度盛衰が連動していたものと考えられる。(河嶋優輝)



ハラビ平遺跡 竪穴建物 101SI 平面図 S=1/100



24B区完掘状況空撮（上が北）



竪穴建物 101SI 石鏃出土状況



竪穴建物 101SI 床面検出状況（南西より）